

令和6年度 第5回研修会

シンポジウム

「博物館と学校連携について ～博物館の使い方～」参加記

神奈川県立歴史博物館 市野 悦子

はじめに

2025（令和7）年2月8日（土）、横浜市歴史博物館講堂にて神奈川県博物館協会 シンポジウム「博物館と学校連携について～博物館の使い方～」が開催された。本シンポジウムは神奈川県博物館協会の研修会として開催されたが、一般の方・学校関係者にも博物館の取り組みや学校との関わりについて知っていただく機会とし、事前申込不要のフリープログラムとして実施された。参加者80名強の内、加盟館園関係者の他、学校関係者などの一般参加者が4割弱参加した。博物館法の改正や学習指導要領の改訂により一層の博学連携が求められる昨今、参加者の興味を引いた内容だったと思われる。

はじめに会場となった横浜市歴史博物館副館長の刈田均氏からの開会挨拶、今回のシンポジウムの司会進行を務めたかわさき宙と緑の科学館の高中健一郎氏からの趣旨説明があった後、刈田均氏、土屋健作氏（小田原市郷土文化館）、秋山幸也氏（相模原市立博物館）、内船俊樹氏（横須賀市自然・人文博物館）より、4例の博学連携の事例紹介を行った。その後、風間洋氏（鎌倉学園中学・高等学校）、山田恵里氏（小田原市立早川小学校）による学校側からのコメントを挟み、上記6名によるディスカッションが行われた。以下に概要を記す。

事例紹介①

様々な学校連携活動 横浜市歴史博物館の事例から（横浜市歴史博物館 副館長 刈田 均）

横浜市歴史博物館は平成7（1995）年に開館した。その設立の構想段階から「教育現場によるくり返しの見学」を趣旨に盛り込んでおり、特に小学生の見学が非常に多いことが特徴である。その事情として、横浜市の市立学校数が小学校334校・中学校143校と膨大であることが一因としてあげられると説明された。この学校数に対し、いかに均

一に対応していくかということが懸念となっているものの、現在まで様々な連携を行っている。連携の事例としては、子どもが博物館に来館するパターンの具体例、館外での活動、オンライン、教員向けがそれぞれ紹介された。特に小学校6・4・3年生は、それぞれ通史を学ぶ学年・地元の歴史（吉田新田）を学ぶ学年・昔の暮らしを学ぶ学年（近隣の都筑民家園と併せた見学）であり、学習指導要領と合致した展示内容であることから団体見学受け入れが多い。そういった対応の担い手は学芸員だけでなく、エデュケーター（再任用校長）、展示解説・活動支援ボランティア、地域団体など多岐にわたっている。特に学芸員以外の担い手が今後の対応に必要不可欠な存在になるであろうこと、その可能性への指摘があった。職位による学校対応の住み分けの必要性を感じる内容であった。

事例紹介②

学校収蔵資料を用いた企画展の開催と今後の展望（小田原市郷土文化館 学芸員 土屋 健作）

小田原市郷土文化館で令和6年度中に行った学校関連事業は、企画展「学校に眠るお宝展」を中心に、関連講演会、ワークショップ、フィールドワークなどで構成された。企画展「学校に眠るお宝展」は、①学校に保管されている資料に博物館レベルのものがあること、②先生たちに学校に資料があるということを認識してもらうこと、を目的に企画された展覧会である。小田原市内の小中学校全25校へ架電することからスタートし、内11校から資料を発見。借用から展示、返却までを学校で行った珍しい展覧会であったことが紹介された。学校から発見された資料は主に石器や土器で、小さい資料が多く、文化館の所蔵資料による追加展示を行うことで、その価値を補足した。高校生による展示ブース作成など、より小中学生に親しみやすい展示になるよう考えられた内容だった。

講演会やフィールドワークは展覧会を補完するものを実施した。この展覧会を通じ、学校の先生と担当学芸員の個人的なつながりや、何かあった際に博物館へ相談するという流れが構築できたことを一番の成果としつつ、対応人員の問題や学校資料の破棄に関する相談など、今後の課題にも言及された。奈良県立民俗博物館の資料廃棄に関するニュースも記憶に新しい中、博物館の役割と地域での活動について、改めて考える機会となった。

事例紹介③

高校と博物館の連携 部活へ首を突っ込もう！ (相模原市立博物館 学芸員 秋山 幸也)

国内のみならず世界各地の博物館共通の悩みとして、中高生が博物館へ来ないというものがある。その中で相模原市立博物館では、高校生を博物館へと呼び込む取り組みとして、部活動との連携事例を発表した。相模原市立博物館は自然・歴史・天文分野の総合博物館である。今回の事例は中でも自然系分野と2つの高校の理科・生物系部活との連携、特に「さがみホネホネ団」による剥製標本作成を軸とした内容が紹介された。10年程前から博物館のボランティアグループが標本作成を行っていたところ、口コミにより高校生が参加することが増えていき、以前から連携を行っていた光明学園相模原高校の協力により、昨年より「さがみホネホネ団」の活動がスタート。標本作成の他、特定外来生物クリハラリスの調査にもつながる活動となった。標本や調査結果は展示などの発表の場も設けられた。文科系部活動は発表の場が少ないことから、博物館がその場を提供することや、他校との交流の場として活用されるこういった活動の意義を指摘された。自然系関連の事例紹介であったが、文科系部活動という点においては人文系博物館にも好例と言えるのではないだろうか。

事例紹介④

市教委等既存事業を組み入れた新しい博物館イベント《みんなの理科フェスティバル》の経緯と現状 (横須賀市自然・人文博物館 学芸員 内船 俊樹)

横須賀市自然・人文博物館からは、既存の自主事業・外部事業を統合・再編成した「みんなの理科フェスティバル」について紹介があった。今年1月に第8回「理科フェス」が開催されるまで、より連携を深化するために学校側と調整を重ねたこ

ととして、①開催時期の調整（学校側の都合の他、他事業と開催時期を合わせる事で双方の集客効果を高める）、②小学生作品の表彰式・発表会の誘致（①で会場使用料を削減し、その分を別会場で行っていた表彰式を実施）、③県立高校生の発表の場の拡大（回を追うごとにブース出展や司会、ワークショップの担当等をプラスで実施）が挙げられた。過去回の参加者が回数を重ねることで出展者側になるなどの影響も見られ、授業の協力とはまた別の学校連携効果があることが述べられた。今後の展望として、自然科学以外の理科分野へのアプローチについて触れ、その後の質疑応答中では、歴史系等分野の異なる博物館同士の連携の可能性も示された。開催回数を重ねることで連携の方法の裾野が広がることも考えられ、より学校連携の形が多様化している現状を伺い知る内容であった。

教員からのコメント・ディスカッション

4つの事例紹介の後、教員2名からのコメントが述べられた。風間氏からは現状の団体見学（イベント的な博物館への学校来訪）をいかに継続的で意義あるものにしていくか、新しい教育指導要領の内容を地域博物館と連携し実施できるか、という部分に着目したコメントの他、鎌倉学園での学校連携事例の説明があった。山田氏は事例紹介②に参加したことで、博物館が見に行く場所ではなく相談できる場、という認識に変化したことに触れた。また、教員側は1度きっかけがあると継続して博物館を利用する可能性があるとし、教員による口コミの重要性を強調した。

ディスカッションでは博物館がもっと当たり前を訪れてよい場所だと学校側に知られていくことの重要性、子どもによる遠足型・放課後型の来訪のどちらの役目も果たせること、子どもが大学生くらいになって戻ってくる環境を作る中長期的視野の必要性など、博物館と子どもの関係性についての意見が多く見られた。学校側の事情として語られた、指導要領の改訂は博物館の役割に変化の起きるチャンスであるということも見逃せない内容である。司会からは、運営上の事情としてある程度決まったパッケージで学校に対応すること、個別アレンジをどの程度実施しているかとの問いかけがあり、各館・学校共に個別のすり合わせが大事ということと、気軽に問い合わせできる

環境があることの大切さについて意見が述べられた。ディスカッションの最後に、神奈川県博物館協会会長の望月一樹氏から、学校連携は地域との連携の重要項目と成り得ること、こういった博学連携関連報告事業の継続開催していくことの重要性について挨拶がありシンポジウムの閉会となった。本シンポジウムを通し、様々な事例を知ることができたことが、学校・博物館共に一番の収穫

となったのではないだろうか。また、学校という組織への対応という事例ではあったものの、キーマンとなる先生個人の力によるものも大きいことを改めて認識することとなった。博学共に相互の情報発信・受信を今後も続けていく必要性を感じる研修会だった。



図1 シンポジウムの様子。

「神奈川県立生命の星・地球博物館における インクルーシブな企画展の取り組みと特別展示室の照明更新に ついて」に参加して

相模川ふれあい科学館 亀ヶ谷 千尋

はじめに

令和7年5月21日に神奈川県立生命の星・地球博物館講義室において、令和7年度第1回研修会「神奈川県立生命の星・地球博物館におけるインクルーシブな企画展の取り組みと特別展示室の照明更新について」が開催された。現在、多くの博物館が施設・設備の老朽化や収蔵庫の狭隘化などの課題を抱えており、さらには教育、福祉、まちづくりなど地域に貢献する新たな価値創造が求められている。本研修会では、神奈川県立生命の星・地球博物館で実施されたインクルーシブな来館者を意識した実験展示と特別展示室の照明のLED化について、その概要をご紹介いただいた。講演者として神奈川県立生命の星・地球博物館の石浜佐栄子主任学芸員と田口公則主任学芸員が登壇された。以下、研修会の参加記として感じたことを交えながら報告する。

講演「企画展『すな』におけるインクルーシブな視点を取り入れた展示」

最初の講演では、令和7年5月11日まで神奈川県立生命の星・地球博物館（以下、県博）で開催されていた企画展「すな 一ふしぎをみつけよう」におけるインクルーシブな来館者を意識した実験展示について、担当学芸員である石浜氏よりレクチャーがあった。本企画展は、砂の多様性、砂がもつ様々な化学的な性質、砂からわかる周辺の大地的特徴、博物館で砂を集める意味などについて紹介した展示である。

近年、日本の博物館においても「インクルーシブ（社会的包摂）」の概念が広く認識されるようになってきている。また、様々な特性や背景をもった多様な方々が博物館にも来館されるようになってきており、県博においても未就学児連れの家族の来館が増えているようだ。本企画展では、手で感じる展示や足裏で感じる展示、音や振動で感じ



図1 砂のさわりの展示。

る展示など、ハンズオン展示を取り入れることで、誰もが楽しみながら科学的な気付きを得られる展示を目指したとのことであった（図1）。

講演では、企画展の準備段階で実際に支援学校（肢体不自由）、盲学校（視覚障がい）、放課後等デイサービス（知的障がい）、保育園（幼児）などを訪れ、砂を使って遊んでもらったり、ハンズオン展示の原型を試してもらったりした過程を解説いただいた。私が所属する水族館においても、ハンズオン展示は未就学児を中心とする低年齢層に人気で、企画展示においてなるべく取り入れるようにしているが、展示を作成する過程で実際に幼児に操作してもらってその反応を見ることはしなかった。事前に様々な人に試してもらうことで、展示の意図が正しく伝わっているかを確認することができ、さらに私たちとは違った視点からの意見を聞くこともできるため、とても有意義なもので、ハンズオン展示を行う場合はこういった検証を実施していくべきだと感じた。

レクチャーに続いて、展示室の見学が行われた。まず、目についたのが各エリアのタイトルで、平仮名と英語で大きく表示され、見やすさと分かりやすさを意識しているように感じられた。各エリ



図2 砂の音あての展示。

アにハンズオン展示が散りばめられ、中央には来館者自身がコマとなって遊ぶ「砂すごろく」と、「すなバー」と題した実験展示が設置されていた。ハンズオン展示には、砂の表面を直接手で触るものや、お手玉やゴム手袋を介して塊としての砂を触るもの、動かして音を聞くものなど単純に五感に訴えるものから、液状化現象やブラジルナッツ効果、安息角の再現実験など少し複雑なものまで多岐にわたり、その種類の多さに驚かされた（図2, 3）。

単純なものから複雑なものまで様々な種類の展示があることで、幼児から大人、さらには様々な特性や背景をもった方々まで幅広く楽しむことができ、確かに「インクルーシブ」を感じられる展示であった。一方で、触ったり操作したりするハンズオン展示につきものなのが、維持管理の苦勞である。実際に本企画展のハンズオン展示でも、破損や砂が床などにこぼれることは多々あったそうなので、維持管理の苦勞がうかがえた。

砂の特性をよくわかっているからこそその多種多様なハンズオン展示は、県博ならではの展示で、違うテーマでのインクルーシブな視点を取り入れた展示も是非見てみたいと期待させる展示であった。

講演「特別展示室のスポットライトおよび展示ケース内照明のLED化について」

次の講演では、県博の特別展示室のスポットライトと展示ケース内照明のLED化について、担当学芸員である田口氏よりレクチャーがあった。現在、照明としてまだまだ広く使用されている蛍光灯は、2027年末までに製造と輸出入が終了する。



図3 色々な種類の砂をさわる展示。

そこで、県博では照明の使用数が多数であることから、展示コーナー単位で少しずつLED照明への切り替えを実施してきた。講演では、特別展示室では天井の照明ダクトに設置してあるスポットライト（ハロゲン球）と展示ハイケース・ローケース内の蛍光灯をLED照明へと切り替えを行い、その過程での調整や工夫について解説いただいた。

特別展示室天井のスポットライトを導入しており、実際に現場でiPadを使って照度や向きを変える様子を見学した。ハロゲン球を使用していたときは手動であったため、高所作業によって向きを変えていたため、初期費用はかかるがこれらの作業を軽減することができることは大きなメリットであると感じた。展示ケースの照明のLED化においては、LEDの特徴として蛍光灯ほど光が広範囲に拡散しないため局所的になりやすく、単純に交換するだけでは終わらず、細かい調整が必要で、設置する位置や向きを変えるなどの工夫を行っていた。

照明は、展示しているものをどう見せるかに大きくかかわってくるため、博物館においてとても重要な役割を担っている。LEDは初期費用が高く資金面での困難も多々あると思うが、2027年までもう間がなく、LED化は避けては通れない課題である。

おわりに

設備の老朽化や新しい価値の創造は、多くの博物館・動物園・水族館においても課題となっている。資金面や人員など課題はどこの館にもあると思うが、今回の研修の内容は参考になることも多

く、他施設との交流や意見交換の大切さを改めて感じた。

最後に本研修会でお話をいただいた石浜佐栄子氏と田口公則氏をはじめ、ご対応いただいた神奈

川県立生命の星・地球博物館の皆さま、また、本研修を企画・運営して下さった協会幹事および事務局の皆さまに感謝申し上げます。

令和7年度 第2回研修会

「横浜美術館の大規模改修とリニューアルオープンについて」 参加記

川崎市岡本太郎美術館 加藤 志帆

◆はじめに

令和7（2025）年8月1日（金）、令和7年度東海地区博物館連絡協議会研修会兼神奈川県博物館協会第2回研修会（3部会合同）「横浜美術館の大規模改修とリニューアルオープンについて」が横浜美術館にて開催された。

研修会は、第1部にて横浜美術館蔵屋美香館長から大規模改修に至る経緯と内容、リニューアルオープンに向けた取り組みに関する講話があり、第2部では、展覧会「横浜美術館リニューアルオープン記念展 佐藤雅彦展 新しい×（作り方+分かり方）」（会期：2025年6月28日（土）～11月3日（月・祝））の鑑賞とともに各展示室及びグランドギャラリーを含めた無料スペース等、館内を見学する時間が設けられた（図1）。

本稿では、研修会を通じて得られた知見を整理し、報告する。

◆横浜美術館 大規模改修の概要

横浜美術館は、1989年、横浜港に面した造船所跡に再開発された「みなとみらい21地区」に開館した。美術館前には車が立ち入らない大きな広場（公園）が設けられ周辺には多くの商業施設も併設されていることから、連日多くの人々で賑わうエリアである。館内には展覧会を実施する展示室、子どもも大人も気軽に創作活動ができるアトリエ、さらに美術図書室の機能を備え、「みる」「つくる」「まなぶ」の基本理念を柱に、開館以来、地域に開かれた美術館として多くの市民に親しまれてきた。

竣工から30年以上が経過した同館では施設や設備の老朽化が進んだことから、施設の長寿命化を図るとともに利用者ニーズの多様化、とくに横浜市が掲げる子どもや子育て世代に喜ばれる街づくりに対応するためリニューアル（改修）事業が計画された。



図1 大規模改修に至る経緯と内容、リニューアルオープンに向けた取り組みについて話す
横浜美術館 蔵屋館長。

美術館は大規模改修工事のため、2021年10月から2023年11月まで施設を休館、その後、施設機能や事業を部分的に再開させ、2025年2月より全館通常営業再開に至った。

◆改修工事の具体的内容

横浜美術館の改修工事の具体的な内容は次のとおりである。

1 長寿命化対策工事

施設の長寿命化を目的とした工事では、電気・衛生・空調機器の刷新、外壁等の経年劣化改修、エレベーター、エスカレーターの更新が行われた。空調機器をはじめとした館内のインフラ環境の整備は、適切な収蔵品保護及び展示環境の観点から、開館から年数を経た博物館、美術館の多くが抱える課題である。新たな設備の導入により、エネルギー効率の上昇や維持管理の合理化が図られ、美術館運営の持続可能性が高まったと言える。

2 バリアフリー工事

多目的トイレ(誰でもトイレ)の増設及びエレベーターの増設が実施され、ユニバーサルデザインの理念に基づく施設整備が進められた。高齢者や障がい者、乳幼児連れの来館者など、多様な背景をもつ利用者が安心して訪れることができる環境の整備は、美術館の公共性を高める重要な要素であると考えられる。

3 機能向上工事

収蔵庫の増設により収蔵品の保管能力が強化された。収蔵庫の増設にあたり、これまで3階にあった美術図書室が地上階(2階)に再配置されることになったが、スペースの有効活用が図られたことにより、既存の施設内での収蔵庫増設が可能となった。美術図書室について特筆すべきは、公園側から直接入室可能な設計へ変更がなされた点である。来館者が気軽に立ち寄ることのできる導線の確保は、開かれた美術館の姿勢を象徴するものだと感じた。今回の研修では収蔵庫の見学は出来なかったが、後学のためにいつか拝見する機会があればと思う。

◆館全体のデザインプロジェクトについて

蔵屋館長の講話で特に印象的であったのが館内のデザインプロジェクトに関する内容である。

先述の改修工事計画が進む一方で、再開後に来館者に対して必要な設備や機能の整備計画が進ん

でいなかったという。そこで、改修工事と並行し、サインボード、家具、什器等の設置計画や、再開後、利用者に館内でどのように過ごしてもらうかを検討する、館を挙げてのデザインプロジェクトを立ち上げたという。

プロジェクトには、空間建築設計に乾久美子氏、サインおよびグラフィックに菊地敦己氏、ミュージアムメッセージの考案にコピーライターの国井美果氏が招へいされ、市民や職員向けのワークショップが開催されるなど、有機的な事業が展開された。

プロジェクトで大きく刷新されたのが広大なエントランスホール「グランドギャラリー」や美術館前広場をはじめとしたフリーゾーンの活用である。

横浜美術館は日本のモダニズム建築の巨匠と称される建築家・丹下健三(1913-2005)が設計した。左右対称に長く伸びるファサードや丸や四角などのモチーフを配したデザインが特徴的な建物で、なかでも広々としたグランドギャラリーは、ガラス張りの天井から自然光が採り込まれた開放的な雰囲気が漂う、同館を象徴する空間である。設計当初、丹下は、市民の交流や文化活動の拠点となる美術館を目指しており、展示室間に設けられたスペースやグランドギャラリーは人々が自由に過ごすための空間を想定していたという。

この度のデザインプロジェクトでは、丹下の理念を尊重しながら、既存施設での多目的な利用が可能となるよう空間設計の見直しが図られた。元々、グランドギャラリーや美術館前の広場は無料で利用できることから、展覧会鑑賞者のみならず、誰もが思い思いに過ごせる、「じゆうエリア」として整備することを目指したという。

改修前、これらのフリーゾーンには椅子やテーブルを設置することは想定されていなかったが、デザインプロジェクトを経て、フリーゾーンに自由に利用できる椅子やテーブルが設置された。

また、大階段の脇には、靴を脱いで本を読みながらのびのびと過ごすことのできる、子ども向けの図書コーナーが設けられた。

館内に配置されたサインボードや家具、什器は、子どもや子育て世代に親しみやすいよう、ピンク色を基調とし、丸みのある形状のものが選定されたという。リニューアル後は、フリーゾーンで飲み物を持ち込んで勉強や仕事をする人、休憩場所として使う人も増え、有効的な活用に繋がってい



図2 施設見学：グランドギャラリーの様子。



図3 施設見学：グランドギャラリーには誰もが気軽に過ごすことのできる空間が設けられている。

るようだ。

以上のように、横浜美術館では改修と並行し館内のサインボードや家具等も刷新し、空間デザイナーと協働による統一感あるデザインが実現された。単なる設備更新ではなく、空間そのものの質を高める取り組みは、美術館の体験価値を向上させるものであり、来館者の滞在時間の増加や満足度にも寄与すると考えられる。また、建築家の想いを継承しつつ、現代的な課題に応える姿勢は、美術館のアイデンティティを守りながら変化を遂げる好例であると感じた。

◆リニューアルオープン事業について

横浜美術館では、2023年11月に新しい公式サイトをオープンさせ、2024年1月には、リニューアル記念特別ロゴとともに「みなとが、ひらく」という新しいミュージアムメッセージやステイトメントを発表した。その後、2024年3月から施設の機能を段階的に再開させ、2025年1月に館内のすべてのサインボードや家具等の設置が完了、2025年2月の横浜美術館リニューアルオープン記念展「おかえり、ヨコハマ」（会期：2025年2月8日（土）～6月2日（月））をもって全館始動に至った。

ホームページの刷新や新しいロゴ、メッセージは、美術館の新たなスタートを象徴する重要な表現手段であると感じる。また、来館者に対して美術館が生まれ変わることを視覚的に届けることができ、期待感や共感を高める効果があるといえる。

蔵屋館長自ら企画された「おかえり、ヨコハマ」展は、横浜美術館の所蔵品へのアプローチはもち

ろんのこと、市内の博物館・美術館、関連施設との連携により地域の歴史や文化資源の活用を試みたという。土地の記憶を掘り起こす展示構成はまさに「みなとが、ひらく」というメッセージを掲げた新しい横浜美術館の幕開けにふさわしい内容だと感じた。

展示では、幅広い鑑賞者に対応するため、難しい語句をやさしい表現にするなどの見直しを図ったという。また、作品を通常より15cmほど低くして展示し、子ども向けの解説、掲示物を充実させた「子どもの目でみるコーナー」が設けられた。筆者も同展覧会を鑑賞したが、子どもの目線に合わせて展示されたルネ・マグリットの《王様の美術館》（1966年、油彩・カンヴァス、横浜美術館蔵）が、より身近に感じられ、親しみをもって鑑賞できたことを覚えている。

グランドギャラリーの大階段では、車椅子ユーザーや足の不自由な方が利用しやすいように、車椅子ユーザーの作家と協働で特別なスロープを設置し作品を鑑賞する試みが展開された。大階段などへの車椅子やベビーカーのアクセスについては、様々な課題が残されていると蔵屋館長は述べており、利用者やアーティストと協働でワークショップを実施しながら、さらに効果的な活用を検討しているという。

◆施設見学

「横浜美術館リニューアルオープン記念展 佐藤雅彦展 新しい×（作り方+分かり方）」を鑑賞しながら、グランドギャラリーや、更新されたエ

レベーターやエスカレーターなどの館内設備を見学した(図2, 3)。展覧会は体験型の展示が多く、また、夏休みの時期とあってか、子ども連れの来場者で大変な盛況ぶりであった。

展覧会鑑賞に加え、蔵屋館長の講話で紹介された無料スペースの活用状況を見学することができた。椅子やテーブルが設置された「じゆうエリア」では、来館者が思い思いの時間を過ごしており、美術館が「居場所」として機能している様子が印象的であった。また、展覧会を目的としない来館者の利用も確認できた。様々な目的で利用するすべての人に配慮した、やさしい空間設計が推進されている点は、今後の企画運営の参考となった。

◆おわりに

本研修会への参加を通じて、横浜美術館のリニューアル事業が単なる施設整備にとどまらず、

美術館の理念や地域との関係性を再構築する包括的な取り組みであることを実感した。

筆者が所属する川崎市岡本太郎美術館においても2026年3月末より大規模改修事業を控えており、今後の施設整備の参考となる点が多かった。施設の性質や予算規模に応じて、改修やリニューアルの内容は異なると思うが、横浜美術館の事例を参考にしながら来館者にとってより開かれた、居心地の良い空間づくりを目指していきたい。

最後に、貴重な学びの機会を提供して下さった横浜美術館の蔵屋館長はじめ、同館の関係者の皆様に深く感謝申し上げます。大規模改修事業を控え、本研修には岡本太郎美術館の学芸員の他、施設管理担当職員等も参加させていただきました。研修会を企画、運営された神奈川県博物館協会の事務局、幹事の皆様にも謝意を表したい。

『博物館の連携事業～巡回展、共通テーマによる展示、館外連携の事例紹介～』に参加して

小田原城天守閣 町田 勇樹

はじめに

令和7年10月30日、平塚市博物館において神奈川県博物館協会第3回研修会が開催された。本研修会は、巡回展をはじめとする、館外の様々な主体との連携事業が博物館にもたらすメリットや意義について、直近の事例を検討することによって、今後の連携事業実施への糧とすることを趣旨としたものである。今回のテーマの背景には、令和4年の博物館法改正によって、博物館が他の博物館や地方公共団体・学校といった地域の多様な主体と連携・協力することが努力義務として追加されたことがある。博物館には今後より一層の館外連携の有効活用が求められるなか、連携事業実施のためのより効果的な方法・手順などを探るべく、参加させていただいた（図1）。



図1 研修会の様子。

事例紹介1

巡回展が始まるまで 特別展『神奈川県植物誌2018』のできるまでとこれから」の計画から実施

はじめに神奈川県立生命の星・地球博物館の大西 亘氏によって、巡回展「神奈川県植物誌2018」が開催されるに至った経緯やその意義についての報告がなされた。

この展示は、県下複数の博物館が協力して実施した「神奈川県植物誌2018」調査とその成果を

テーマとして、調査に関係する博物館、関連施設において2018～2020年度に開催されたものである。「神奈川県植物誌」調査とは1979年に始まった市民参加型の調査活動で、県内の複数の博物館が協力・連携し、調査で得られた植物標本を分担収蔵するものである。

全国的にみても県域規模の植物調査において、全県的な調査を三回完遂し、その都度植物誌として刊行した例は他にないとのことであり、大西氏は県下の博物館群の存在と、世代を超えた連携の継続が実現の背景にあると指摘する。大西氏は、この植物誌調査における三代目世代の学芸員であるとのことだが、連綿と受け継がれてきた研究成果を引き継いで、展覧会というかたちに昇華させることができたのは、学芸員個々の努力だけでなく、長年本事業を継続することによって紡いできたそれぞれの関係性があったこそだと感じた。

また大西氏は、長期にわたってプロジェクトが続いたのは、植物誌をめぐる活動が、資料に基づく博物館の基本的活動と整合的であるからだとも指摘する。植物誌調査における諸活動を博物館の役割に落とし込むことは、連携事業の意義を考える上で非常に重要なポイントだと感じた。

この巡回展は、展示の中心となるストーリーは共通であるものの、そこにその地域独自の展示を加えることによってオリジナリティを出しているとのことである。特に、相模原市立博物館において、当時熊本で発生していた水害による植物標本のレスキュー作業の展示をおこなったという事例には興味があった。

事例紹介2

巡回展 企画展『神奈川県植物誌2018』と三浦半島の植物たち」の開催

次に、横須賀市自然・人文博物館の山本 薫氏によって、『神奈川県植物誌2018』巡回展における

具体的事例として、同館における展示が紹介された。

はじめに巡回展開催までの流れを追いつつ、巡回展開催によるメリットのまとめがなされた。すなわち、展示の基礎となる調査研究から連携をおこなうことによって、展示内容の十分な理解につながるという点。完成されたパネルを借用したり、事前に適切な情報共有をおこなったりすることで、展示準備期間・労力・コストの削減につながるという点。スケジュールが短縮されることによって、展示の独自性付加・関連企画の充実などが図れる点。巡回展の一部を深掘して新たな展示を着想できる点が挙げられた。

特に展覧会の独自性については力を入れられていたようで、植物誌巡回展における横須賀市自然・人文博物館の取り組みが紹介された。総じて横須賀という地域に即した展示の工夫がなされており、単なる巡回展にとどまらない、横須賀という地域で展覧会を実施することの意味をよく表現できていると感じた。特に神奈川県立生命の星・地球博物館所蔵の「杉田のスギ」は印象的で、杉田という地名になじみの深い横須賀地域の人々にインパクトを与え、展示を鑑賞しやすくするという工夫は非常に面白いアイデアだと感じた。山本氏が指摘するように、コスト・労力が削減できるというのは大きなポイントで、日々様々な作業に追われるなかで、展示そのものや関連企画の充実を図る時間が生まれるのは、巡回展を実施することの大きなメリットであると感じた。

事例紹介3

「神奈川震災100年プロジェクト」の計画から実施まで —横浜開港資料館における連携事業を踏まえながら—

休憩をはさんで、横浜都市発展記念館の吉田律人氏によって、「神奈川震災100年プロジェクト」実施に至るまでの経緯と背景について報告がなされた。

阪神淡路大震災と東日本大震災によって社会の災害に対する関心が高まる中、博物館においても、「災害」という人文科学・自然科学の分野を超えたテーマに連携して取り組む試みがなされてきた。吉田氏は、「神奈川震災100年プロジェクト」の実施には、こうした社会背景と時間をかけて多分野の研究者や学芸員が連携してきた蓄積があるからこそできるものだと指摘する。連携事業は、運用

面・学術面で大きな成果をあげることができるというメリットが注目されがちだが、運営組織の性格や文化の違いに起因する調整の難しさが課題としてあり、90年代から長期的に「関東大震災」という共通のテーマに対して連携方法を模索し続けていたからこそ、震災100年という節目に成果を上げることができたのだろう。

また本プロジェクトのように、連携事業の度に新たな課題をみつけ、改善してよりよい展示を作り上げていくことができるのは、長期間にわたって同テーマに対する連携事業を継続していくことの大きなメリットであると感じた。

事例紹介4

関東大震災に関わる展示 「神奈川震災100年プロジェクト」にかかる連携展示企画と今後の展望」について

続いて平塚市博物館の野崎 篤氏によって、「神奈川震災100年プロジェクト」を踏まえた今後の連携事業実施のための展望について報告がなされた。

はじめに、連携展示をおこなうことのメリットがまとめられ、対象が同じでも分野ごとに異なった切り口で展示ができること、他館の資料状況を把握することによって新たな調査研究ができることなどが挙げられた。連携事業は、それまでの継続した取り組みや関係性によって成り立つものであるが、連携事業をおこなうこと自体が新たな知見・関係性を生み出し、次の研究・連携事業につなげることができるというのは、連携事業実施の大きな意義だといえる。また、野崎氏は、連携事業において県博協が予算等の取りまとめをすることによって、より効率的な事業運営が可能になると指摘する。県博協が博物館同士をつなぐ媒介としての役割を果たすことは、今後の連携事業促進の大きなメリットとなるだろう。

事例紹介5

地域の主体との連携 「時を超えた多様な主体との連携—春期特別展『近代ひらつかの女性たち』から」

最後に平塚市博物館の早田旅人氏によって、同館で開催された市民団体との連携展示についての報告がなされた。

本展覧会は、早田氏が近代史・女性史を専門としていないことから、地域の女性史を専門とする

市民団体に協力を仰ぎ、共同で開催したものとのことである。博物館にとっては、学芸員がカバーしきれない専門分野の展示を実現でき、資料の寄贈を受けることもできる利点がある。また市民団体にとっては研究成果発表の場を得られるとともに、博物館を媒介としてさらなる研究活動ができるといったように、双方にとって大きなメリットのある連携事業であったことが報告された。私自身学芸員となって日が浅い中で、自身の専門分野以外の資料を扱わなければならない難しさを肌身に感じていたところであり、本報告は、学芸員が特定の分野に捉われない多様な展示企画を実現するうえで大いに参考になると感じた。

おわりに

本研修会における報告者は、いずれも長期にわたる研究成果の蓄積、および団体・個人同士のつながりが連携事業の実現にあたって重要なポイントであると指摘しており、博物館における連携事業とは、時間をかけた普段からの積み重ねと、それを上手に活用する学芸員の能力があって初めて実現することができるものだと感じた。研究活動も同じであるが、内に籠って資料に向き合うばかりでなく、様々な分野の人・物に触れあって多角的な視点を持つことの重要性に改めて気づかされた研修会であった。

相模原市立博物館のリニューアルしたプラネタリウムの見学と解説に参加して

観音崎自然博物館 柴野 達彦

はじめに

2025年12月5日に相模原市立博物館において、令和7年度第4回研修会が開催された。相模原市立博物館は今年で30周年を迎えた総合博物館であり、7月にプラネタリウムがリニューアルオープンしている(図1)。研修会の内容は、プラネタリウムの大規模更新を担当された学芸員の田子智大氏による概要および経緯についての事例紹介と、実際のプラネタリウム投影「星空テラス」の見学であった。また、館内の自由見学時に、開催中の特別企画展であるポケモン天文台についても見学できるように配慮していただいた。

施設や展示の更新は、規模の大小あれども日々直面する課題の一つであり、大規模更新も運営が長期化すれば必要となることである。プラネタリウムについてのみならず、事業にあたっての調整や段取り、考え方、工夫について、説明していただき興味深い内容であった。見学の感想も交えながら参加記として当日の内容を報告させていただく。



図1 リニューアルしたプラネタリウム。

プラネタリウム更新の概要について

今回のプラネタリウム更新では運営・投影に関するほぼ全ての部分を更新されたということであり、ドームの改修から最新の投影機をはじめとする各設備について、それぞれご紹介いただいた。

プラネタリウムの投影に関係する設備の更新はもちろんのこと、イベントや講演会といった利用も想定された設備が整備されており、開会挨拶ではステージで話す姿が背後のスクリーンに大きく投影されていた(図2)。スクリーンの映像やドーム内の様子は館内やオンライン上にも映すことができるという。プラネタリウムの上映という専門的な役割に加えて、多様な目的に活用可能な利用価値の高いものとなっていた。

さらに、広くゆったりとした座席や、手元の資料を見やすくするための照明が設置されたことで、利用者の快適性も向上されている。その中でも、ドーム後方の部分を、多目的ルームとして別室の観覧スペースに改修したことは、ユニバーサルな取り組みとして期待を感じた。現在は、上映中に子供が泣いてしまったなど、何か事情があってドーム内の見学が続けられない場合のみ利用を提案しているものの、泣いた乳幼児を抱えて見学を続けるということは難しく、多くの場合には退出を希望されるそうだ。しかし、退出するしか選択肢がないことと、見学を続ける選択肢がある上で退出を選択することはまったく意味が異なるだろう。少数でも使用されたということは、これまで見学を途中で諦めなければいけなかった利用者が見学可能になったということである。社会的に多様性への配慮が求められるようになっていることもあり、公共の場でもある博物館では、このような取り組みが必要となってくるのではないだろうか。

また、今回の更新では操作卓を以前より広く快適にし、床を交換しやすいタイルカーペットにしている。更新は目標ではなく、はじまりであるという言葉がまとめの中にあっただように、また次の更新までの期間を維持管理していかなければならないことを考えると、使いやすく余計なストレスが無いこと、保守しやすいことも更新時に検討すべき大切な要素であると感じた。



図2 開会挨拶の様子。

プラネタリウム投影「星空テラス」の見学

当日の星空や注目の天文現象などを中心に紹介する番組「星空テラス」の上映を見学させていただいた。開場するとどンドン席が埋まっていき、ほぼ満席に近い盛況ぶりであった。来館者のプラネタリウムへの需要と関心の高さが伺える。今回の更新では、星空や映像が鮮明に美しくなったことに加えて、番組内でJAXA相模原キャンパスについての紹介をしている。月ごとに内容が変わることになっており、今月は無電波響室というアンテナ開発に関わる設備の紹介であった。このような地域の特性を活かした内容は独自性があり、魅力的である。

プラネタリウム更新の経緯について

プラネタリウムの更新は、令和4年度の実現に向けた調整から令和7年度のリニューアルオープンまで4年かけて行われたが、発端は平成25年度まで遡るということである。当時は実現に至らなかったものの、市の施策として宇宙教育普及事業が実施され、その後も予算請求の機会などを通じてプラネタリウム更新の必要性を継続的に訴えてかけてきた。また、JAXA相模原キャンパスがあることから、博物館以外でも宇宙や天文に直接または間接的に関係する施策が継続されているという地域の特色がある。このような背景もあり、他施策との連携によってプラネタリウムの更新が少子化対策事業の施策に位置づけられたことで更新の決定へと至っていた。最終的な合意を得る過程では、プラネタリウムの更新についての必要性だけでなく、更新をしなければいけない必然性が重要視されたということであった。

プラネタリウムの更新が決定した次年度には事業者の選定と事業費の確保に動いており、3年目に

は着工に向けた準備と実施、4年目には更新後の運営や関連事業の準備を経てリニューアルオープンおよび関連事業の実施と、更新の実現に至るまでの過程は多岐にわたっている。様々な業務への対応が求められる中で円滑に進行していくには、できることを柔軟に考えていくことが大切ということであった。

ポケモン天文台

自由見学の際に、ポケモン天文台も見学させていただいた（図3）。閉館時刻の迫る平日16時過ぎでも待機列があり、人気の高さが伺えた。会期の始まった11月の来館者が例年に比べて5倍近くなったというその集客力は凄まじいものである。

ポケモンの大型模型や限定のデザインというキャッチーな部分もあるが、総合監修が国立天文台ということもあり、天文の内容について説明しながら関連するポケモンが登場するという展示内容であった。ポケモンについてもその背景を知ること面白さを感じるとともに、ポケモンをきっかけに天文についても知るきっかけとなる展示だと感じた。



図3 ポケモン天文台の様子。

おわりに

研修会には初めて参加させていただいたが、他館の事例について実際の過程と共に知ることができ、今後の参考となる有意義な時間であった。特に、必要性よりも必然性が求められたということは印象的であり、日々の業務においても意識していくべき大切な視点である考えさせられた。

最後にこのような研修会を実施いただいた相模原市立博物館の皆様、県博協の事務局および幹事の皆様に感謝を申し上げます。